



今回は収集した資料のチェックの第四回目である。収集した資料情報の中には、事実でないものが含まれている。それを見分けるには、資料情報の元となるマスコミ報道から研究論文に、推測や解釈が、いかにして紛れ込むかのメカニズムを理解しておくことが、大切である。

## 第二十七話 資料のチェック④

### 事実と推測を誤解させる仕組みを理解する

書かれた資料の内容には、一見事実のようなふりをした推測や勝手な解釈による記述が少なくなく、資料の読み方には十分な注意が必要である。マスコミ報道についてみれば、「飛ばし」、「偏向報道」、「虚偽報道」、「捏造報道」といったキーワードでウェブ検索すれば、この種の報道に関する数多くの記述が見つかる。

さらに、この種の問題については、数多くの書籍や論文が発表されている。市販の書籍に関しては、アマゾン・ドット・コムや紀伊国屋といった大手書籍サイトを、上述のキーワードで検索すれば、簡単に見つけられる。

この書籍サイトで、著者名、資料の目次、内容紹介、書評、読者のコメント等を調べれば、問題の概要や事例などが入手できる。著者名で再度ネット検索すれば、著者自身のブログや著者を紹介するサイトが見つかる可能性も高く、更に詳しい情報も入手できる。

また、事実の裏付けのない行き過ぎた報道は、「名誉毀損」や「刑事告訴」に発展する場合も少なくない。事実に基づいた報道でも、説明が不十分だったり、誤解されやすい部分が「風評被害」のキッカケとなるケースも、ネット上で話題になっている。

そもそも、マスコミ報道の対象は、視聴者受けする部分に集中する。例えば、オリンピック選手の活躍である。マスコミが報道するのは、メダルを期待される選手ばかりであり、試合終了後に報道されるのは、メダル獲得選手に絞られる。視聴者

受けを狙うため、限られた選手に関する事実報道だけではならず、推測による水増しがなされる。

ちなみに、多くの人々が利用している百科事典のウィキペディアのサイト内検索をおすすめする。{事実 推測 site:ja.wikipedia.org}、または{事実 憶測 site:ja.wikipedia.org}、{事実 歪曲 site:ja.wikipedia.org}などと検索すれば、様々なケースが存在することが、簡単にわかる。

さて、マスコミ報道に限らず、教科書の記述、研究論文から検察調書、裁判の判決文、医師の診断書まで、すべての記載には、事実だけでなく推測や解釈が含まれる。正確な事実の忠実な記述は難しく、拡大解釈や過小評価は避けられない。また、事実の足りない部分を推測で補填する資料は数多い。

世の中の識者は、「事実と推測」をきちっと区別して資料を読むように喚起しているが、それだけでは不十分である。マスコミの報道から研究者の論文まで、推測がいかにかんがれ込むかについてのメカニズムを理解しておくことが、大切である。

事実と推測の関係を理解するうえで、事実情報への「要求期待水準」と「実現可能水準」のギャップという図式で考えると分かりやすい。前者は当事者や視聴者が求める事実情報への期待水準であり、後者は報告者が実際に入手可能な事実情報の現実水準である。

この双方のギャップを埋めるのに利用されるのが、推測・解釈である。そこに、報告者の思い込み、思い違い、勘違い、曲解、先入観、偏見、固定観念などが、入り込むのである。ギャップが大きい程、推測・解釈の占める部分が多くなる。

そして、この推測・解釈の信頼性を高め、事実に相違ないと思わせるテクニックが、「権威による保証」である。事実の信頼性が高いとされるものに、百科事典や辞書、さらに教科書の記述、大手新聞社の報道、著名な研究者の論文、裁判所や検察・警察の判決文や調書などがある。残念ながら、この信頼が裏切られる事件は後を絶たない。

この信頼性を支えているのは、専門家の知的権威、歴史・伝統に負う権威、裁判官や審判など公的資格による権威、権限ピラミッドの頂点に位置する権威（いわゆる権力）である。いずれの権威も、事実に裏付けられた記載内容の正しさを決して保証しない。それは、歴史が証明している。

さて、「要求期待水準」と「実現可能水準」のギャップについて、もう少し説明しよう。前者の「要求水準」に大きく影響するものとして、期待度、速報度、影響度などがある。

期待度とは、スポーツ選手活躍への期待、新作メディア作品への期待、新製品発売への期待の大きさである。例えば、これから発売予定の人気タブレット、スマホ、ゲーム機などの話題である。期待の高い製品ほど、様々な憶測情報が流れる。

速報度とは、報道のスピードが期待される度合いで、災害時のニュース速報や身内・知り合いの安否確認、国会議員の選挙の開票結果、人気の高いスポーツ競技の

勝敗などが、挙げられる。速報性が期待される程、事実の報道について事前準備が求められる。

影響度とは、企業の業績や国民の生活に影響する度合いである。国家経済の破綻、農産物への天候の影響、企業活動への為替や株価の影響、国民生活への税金の引き上げや物価の変動などが挙げられる。この影響度は、それがプラスかマイナスかによって、内容が大きく違ってくる。

また、これらの要素は別々のものでは決していない。大地震や大津波の場合は、地元住民への影響度が高く、速報度も求められる。世界記録保持者のオリンピックの活躍には、期待度が大きく、試合結果の速報性も求められる。

次に、可能水準に大きく影響するものとしては、アクセス度、余裕度、不都合度、情報力度などが挙げられる。これらの要因は、要求水準に応えるための事実の正確な情報把握を、難しくさせる場合が多い。

アクセス可能度とは、情報源にアクセスしやすさである。例えば、時間（過去、現在、未来）、情報源の地域（僻地や大都市といった交通の利便性）、場所や構造物特性（震源地や原発内部など）、相手国との国交の有無などがある。

この中で、時間の問題はクリティカルである。明日以降の部分については、多くを憶測や解釈に頼らざるを得ない。情報化社会が進むほど、世間は明日以降の動向に関心を強める傾向があり、このため推測や解釈が大きな比重を占めることになる。

余裕度とは、情報収集に許された時間・人・モノ・金の制約である。時間でみれば、この余裕の大きいほど、事実に関する情報は集めやすい。時間的余裕が余りなくても、事前の情報収集の蓄積が可能であれば、事実の比重は高められる。

すなわち、近未来へのスケジュールがあらかじめ決まっているケースと、突然予告なしに発生するケースで、情報収集の余裕度は大きく変わってくる。

近年は、大統領選挙、国際会議、オリンピック、企業決算など、今後のスケジュールが予定・計画されているものが増えている。報道する側はそのタイミングに合わせて、情報収集の準備ができる。

しかし、大地震や津波、航空機や列車の大事故のような突発的な事件や事故は、情報収集に困難を極めることになる。このため、限られた映像や情報の繰り返し放送や専門家の推測や一般論的解説で、その場しのぎに終始することになる。

情報力度とは、リポーターや研究者の専門的知識、経験・センス、権限、情報源（人）との繋がりといったものである。専門的知識のある人ほど、また情報源とつながりのある人ほど、事実に関して質・量に優れた情報の入手が容易になる。

不都合度とは、情報源にとって不都合な情報が含まれる度合いである。政府間の秘密協定、国民との公約を反故にする政策、警察・医師・裁判官などの不手際、企業の不正行為、業績悪化などなど。

当事者が社会から批判を浴びやすいケースほど、事実の情報入手は難しくなる。近年、この不都合に関係する憶測や歪曲が高まっているのは、周知の事実である。